# 高野邦夫句集

目次

序 1
多摩丘陵 5
真直ぐなる眼 32
小さき幸せ 55
炎の街 79
病める日々 93
詩の坩堝 108
後記 135
補記 137
略年譜 139

# 序

高野邦夫には、もともと詩人としての一連の優れた実績がある。では、君における句作とは、どのように理解すべきなのだろうか。

詩作は、文学創造の動機・過程のすべてがそうであるように、現実の一事象に触発され駆り立てられ、それをかく在らしめている背後のものに迫ってゆく、君の場合もそのことに変りはあるまい。この場合句作は、こうした営みの持続の果の、ふととり落した事象の断片への執着に過ぎないかも知れない。だがわれわれは、このような断片の中にこそ生命の集約されたもの、宇宙的な拡がりをはらんで息づいているものがあり、それを誤



らずすかさず把え得れば、作品に無限の生命感を与え得ることを知っている。句友高野邦夫との交りは、すでに三十年に及んでいるが、その間君を把えて離さなかった作句は、このような成果への予感に因るものだろう。

ところで、作家の歩みを対象との関わり方から見た場合、二つの行き方が考えられよう。一つは、創造の営みの中に己が生ける現実の重みを重みとして曳きずらざるを得ないもの、私はこれを中絶・欠如の痛みに立つわびの詩人と見る。もう一つは、そうした重みを跳躍台として飛躍し、己が一世界を創造し、結果として、そこから現実を照らし出す、いわゆるさびの詩人である。高野邦夫の重い詩感は、より前者に近いと見られよう。そこには年代と共に変化の徴しをはらんできているが、私は、

その歩みの中に一書をまとめるに足る作家良心を見るものである。

　もともとわが国には、わびとさびの詩感は併立してあった。芭蕉は、わび茶人利休の抵抗の美感とさび歌人西行の円融の詩感とを等しく評価しているが、それはその底に〈まことを責める〉共通の詩精神を見たからだろう。まことに作品は、その作家が本音を生まにうち出す、その誠心の深さによってのみ高次の普遍性が付与される。われわれ同行の歩みはまことに多様であるが、〈まことを責める〉精神において軌を一にしている。高野邦夫は、その一人として最も信頼できる人間であることは、その作品を見て頂ければ判然とするだろう。



昭和六二年一月

不破　博

## 多摩丘陵



早春の昏(く)るる疎林(そりん)の光かな

春の雪舞ふや丘陵樹(き)の声す

麗(うらら)かの多摩水光や羽搏(う)つ鳥

雉笛（きじぶえ）や森は弥生（やよい）の集落趾（あと）*一

春光の疎林熊笹（くまざさ）踏み分けし

*一「雉笛」とはキジを呼び寄せるための笛。



春光や小学訓導明治の碑*二

春疾風鶏は地を搔（か）く双肢（さうし）かな*三

*二「訓導」とは、教え導くこと。

*三 疾風は「しっぷう」「はやて」と読める。双肢は「そうし」と読むが、俳句のふりがなは句に合わせて、歴史的仮名遣いで表記する。

涼しきや鶏ふふみ鳴く縁の下*四

白南風（しらはえ）や草の間かける放ち鶏（どり）*五

*四　「ふふみ鳴く」とは古語の「ふふむ」（膨らむ）と「鳴く」でできた複合動詞。

*五　「白南風」とは梅雨の終わり頃から吹く南風のこと。



羽抜鶏（はぬけどり）孤高といふも愚かかな

白南風（しらはえ）や葉裏葉裏の森の息

汗すなり茶毘（だび）の鉄扉（てつぴ）をまのあたり*六

夏蝶や何に憑（つ）かれて森に迷ひ

蒼空（さうくう）や万緑詩（うた）を孕（はら）みゐつ

*六　著者の母ことの死を悼（いた）んで詠んだと思われる。



えご落花清浄（しやうじやう）と野の仏かな*七

明易（あけやす）を老醜きざす猫の歩よ*八

*七　「えご」とはエゴノキのことで、その種は有毒である。「清浄」は邪念のないこと。

*八　「明易」とは夜の明けるのが早い夏至（げし）前後の夜のこと。

昼寝覚魂玻璃(こんはり)の色に染(そ)み*九

手折(たお)りけり丘辺(おかべ)頬に触(ふ)る花芒(はなすすき)

*九「玻璃」とは水晶、またはガラスのこと。「染む」は「染まる」を表す文章語。



今朝(けさ)秋の森の径(みち)や瀬の音す

今朝秋の水辺(みづべ)や石の炊(かし)ぎ跡*一〇

*一〇「炊ぐ」とは米や麦を「炊(た)く」ことを表す古語。

今朝秋の歩(ほ)や林間の沼の色

今朝秋の天や一樹(いちじゅ)の声すなり



今朝秋の山容心気透徹(さんようしんきとうてつ)す*一二

今朝秋の風や胸毛の濃き男

秋立つや多摩丘陵の一石碑

*一二「山容」とは山の姿。「透徹」とは澄み切っていること。

霊園の籬（まがき）秋色（しうしよく）寂びゐしよ*一二

---

*一二「籬」とは竹や柴を編んだ垣根のこと。



銀杏落葉（いちやうおちば）鐘楼の階崩れゐし*一三

地図に無き径（みち）や風の赤のまま

---

*一三「鐘楼」は「しょうろう」または「しゅろう」と読む。「階」は「かい」または「きざはし」と読む。階段のこと。

草の実や輪舞（りんぶ）華（はな）やぐ河川敷*一四

旅果ての日の口紅（くちべに）や花野雲*一五

*一四　「華やぐ」とははなやかになること。
*一五　「野」は本来、変体仮名の「の」で表記すべきところだが、ここでは漢字「野」で代用する。



風に乗る紙飛行機よ秋の空

秋を聴く橋上（けうじやう）の歩や多摩の奥

華やぎの声す水辺の夕芒（ゆふすすき）

秋風や渡船(とせん)廃せし多摩の岸*一六

乾(から)びゐで風に息する木の葉かな*一七

*一六　多摩川にはかつて多くの渡しがあったが、ここでは昭和四〇年代まで残っていた丸子の渡しか菅(すげ)の渡しを指すものと思われる。

*一七　「乾ぶ」とは乾燥して水分がなくなること。



木の実落(お)つ鳥語(てうご)は冥(くら)き彼方より*一八

菊花展(きくくわてん)禰宜(ねぎ)白髪を掻(か)き撫(な)でつ*一九

*一八　「鳥語」は「ちょうご」と読み、鳥の声のことをいう。

*一九　「禰宜」とは神社の神職のこと。「つ」は完了を表す助動詞。

郷土史家石仏語る秋うらら*二〇

小鳥来る雲は瑠璃（るり）の夕翳（かげ）り*二一

*二〇「うらら」とは空がよく晴れてのどかな様子。
*二一「瑠璃」とはるり色のことで、紫がかった濃い青。



晩菊（ばんぎく）や羽累（かさ）ねたる鶏二三

燦爛（さんらん）の風樹（ふうじゅ）の濡れや秋の沼*二二

*二二「燦爛」とはまばゆいさまを表す。ちなみに、著者には『燦爛の天』という詩集がある。

暫(しばら)くは華やぐ落暉(らくき)秋の沼*二三

行く秋や声寂び唄(うた)ふ木曽荒男(あらを)*二四

*二三「落暉」とは落日、夕日のこと。現代仮名遣いでは「らっき」と読む。

*二四「荒男」はここでは「あらおとこ」ではなく、「あらお」と読む。荒々しく猛々(たけだけ)しい男。



寒林を声透(す)き朱唇(しゅしん)現れしかな*二五

冬朧(とうろう)の烏(からす)は詩を舞ふ多摩丘陵*二六

*二五「朱唇」とは口紅をつけた赤いくちびるのこと。

*二六「冬朧」は「とうろう」と読ませるのか。冬の薄曇り。

冬木原根株(ふゆきばらねかぶ)の塊(くれ)の腐(く)ちつも*二七

冬の橋水勢(すいせい)鈍く煌(きら)めきつ

*二七 「塊」は「くれ」と読ますのか。かたまりのこと。「腐ちつも」で「朽ちてしまっても」という意味。



疎林はや残照透(す)けり冬の沼*二八

寒波来るや遠山(ゑんざん)澄める多摩丘陵

*二八 「はや」とは「早くも」という意味。

一木（いちぼく）の虚空（こくう）を寒鴉（かんあ）遥（はる）かかな[*二九]

荒涼の暮景（ぼけい）寒鴉の数なりし[*三〇]

*二九　「寒鴉」とは冬のカラスのこと。

*三〇　「暮景」とは夕暮れの景色。冬のカラスが群れをなす荒涼としたさまを詠んだ。



鴉（からす）舞ふ多摩丘陵の二月かな

熊笹（くまざさ）の尖（さき）裂（さ）く風の二月かな

枯れ草の風に傾く落暉（らくき）かな

寒林や闇を孕(はら)みて北斜面

寒禽(かんきん)の声す竹林(ちくりん)透く光*三一

枯原(かれはら)やもの音吾(われ)に帰(き)するのみ

*三一　「寒禽」とは冬の鳥のこと。



真直ぐなる眼

凛烈（りんれつ）の梅の気配や寺泊り*三二

真夜（まよ）の花わが蹌踉（さうらう）を許されよ*三三

*三二「凛烈」とは寒さが身にしみるさま。「寺泊り」で佐渡の寺泊に泊まっていることを表す。

*三三「蹌踉」は「そうろう」と読む。足もとがよろめくさま。



都市の魔性（ましやう）目覚めし真夜（まよ）の桜かな

囀（さへづ）りの国原（くにはら）にをり一礎石*三四

*三四「国原」とは広々とした平原のこと。

陶器片彩(あや)美しや春渚(はるなぎさ)

逝(ゆ)く春の深空(みそら)よ響く花鋏(はなばさみ)[*三五]

---

*三五　「深空」とはまっ青な空のこと。



一山(いちざん)の緑の翳(かげ)や法螺(ほら)の音(ね)す[*三六]

青年僧りんりん汗の行歩かな[*三七]

---

*三六　「法螺の音す」で、修験者が吹く法螺貝の音が響くさまを表す。

*三七　「りんりん」とは「凜々」と書き、男性的でりりしいさまを表す。「行歩」は「ぎょうぶ」または「こうほ」と読む。歩くこと。

向日葵（ひまはり）の林立（りんりつ）過疎の里なりし

夏蝶や日矢（ひや）盤石（ばんじやく）を貫ける*三八

*三八　「日矢」とは雲間から射し入る光のこと。「盤石」とは大きな岩のこと。



遠き嶺（みね）白靴（しろぐつ）の歩の吾が思郷（しきやう）*三九

夏木立（なつこだち）沢鳴り雨の気配とす

*三九　著者は太平洋戦争末期に予科練に志願した。入隊していた頃の思いを描いているのか。

黒南風（くろはえ）や老翁（らうをう）海に何を喚（おら）ぶ*四〇

夕凪（ゆふなぎ）や吃水（きつすい）深く投錨（とうべう）す*四一

*四〇「黒南風」とは梅雨の頃に吹く南風のこと。「喚ぶ」とは大声で叫ぶことを表す古語。

*四一「夕凪」とは海風から陸風に変わるとき、一時的に風がやむこと。「吃水」とは水上の船が水に沈んでいる部分の長さ。



砂に埋もれゐし人の眼（まなこ）や沖の雷（らい）

焦心の裸身渚（なぎさ）を駈（か）け行けり

蛇数匹嬉嬉（きき）とし川面（かはも）滑りをり

獣園(じゅうゑん)の蛇百態の閑(しず)けさよ

砂の声すなるあなうら秋の浜*四二

*四二「あなうら」とは足裏を表す古語。砂の上を歩いて鳴る足音を、砂の声にたとえている。



蜑(あま)二三声す秋光(しゅうくわう)の砂防林*四三

秋の海一鶫(いちょう)瞳の厳しさよ

*四三「蜑」とは海に潜って貝や海藻をとる女。海女。

縹渺（へうべう）の奥処（おくが）は知らず秋の湖（うみ）*四四

湖（うみ）抱（いだ）く里に芋掘る閑けさよ

*四四「縹渺」とはかすかで、どこまで広がっているか分からないさま。



谿谷（けいこく）の深潭（しんたん）秋の声すなり*四五

満山（まんざん）の露払ひたり秋の風*四六

*四五「谿谷」とは川の流れる深い谷。渓谷。「深潭」は深い淵（ふち）のこと。「秋の声」は鹿の鳴き声か。「奥山に　紅葉踏みわけ　鳴く鹿の　声きく時ぞ　秋は悲しき」（猿丸大夫）

*四六「満山」とは山全体のこと。

満山の紅葉（もみぢ）明りを歩みけり

木の実降る道極（きは）まれり水音す*四七

*四七　「極まる」とはその先がないところまで来たということ。



木の実落つ林道太虚（たいきよ）に連（つら）なれり*四八

秋暮るる禰宜（ねぎ）が白緒（しらを）の草履（ざうり）かな

*四八　「太虚」とは大空、虚空（こくう）のこと。また、古代中国の宇宙観で、陰陽の生じる大本のこと。

かかる小さき去来の石の秋すなり*四九

逝く秋の雲や尾垂るる佐渡の沖*五〇

*四九　「かかる」とはこのようなという意味。「去来」とは行ったり来たりすること。俳人の向井去来の名を踏まえた発句か。

*五〇　「垂る」は「垂れる」の古語。



波止刻む逆白波や冬落暉*五一

冬 鷗 波 間 歐 の 一 埠 頭

*五一　「波止」とは海中に延びる防波堤のこと。「逆白波」とは水の流れに逆らって立つ白波のこと。「落暉」は落日、夕日のこと。

氷湖はや昏(く)るる茜(あかね)をとどめざる[*五二]

大枯野一木(いちぼく)魑魅(ちみ)が棲処(すみか)とす[*五三]

*五二　著者には『氷湖』という詩集がある。「昏る」とは暮れるの古語。「茜」はあかね色、紫がかった赤色。

*五三　「魑魅」とは山林に宿る精霊。



一木の影抽象の冬田(ふゆた)かな[*五四]

一寒村山脈背の二月かな

*五四　「抽象」とは対象から性質や共通性を抜き出すこと。

廃鶏（はいけい）の二羽相倚（あひよ）れる寒さかな*五五

寒林の旧祠（きうし）に至る径（こみち）かな*五六

*五五　「廃鶏」とは卵を余り産まなくなって、食肉にされる運命の鶏。二羽が自ずと身を寄せ合う寒さや心細さを詠んでいる。

*五六　「旧祠」とは神仏を祀（まつ）る古い祠（ほこら）。



四囲（しゐ）寒林魂透（す）いて此処（ここ）に在らず*五七

大枯野鳥獣息を潜めたり

*五七　人けのない冬の山林で、自分自身さえ消えてしまいそうな荒涼とした風景を詠んでいる。

改札の無人を風の落葉(おちば)かな

寒灯下(かんとうか)教へ子原級留置とす

襟(えり)立てし外套(ぐわいたう)の背の鉄扉(てっぴ)かな



雪降り積(つ)む彼岸(ひがん)此岸(しがん)や川一筋*五八

*五八「降り積む」とは「降り積もる」の古語。「彼岸」は向こう岸、「此岸」はこちら岸のこと。

# 小さき幸せ



春愁（しゅんしゅう）や心の襞（ひだ）の淡き影[*五九]

地図を読む囁（ささや）き春のシャンデリア[*六〇]

*五九　「春愁」とは春に感じる物憂い気持ち。または、青春期の感傷的な思い。

*六〇　春の野で地図を片手にハイキングする人々のささやきを、春のまばゆい光にたとえているのだろう。

永日光裡（ながひかり）博物館を出（い）でしかな[*六一]

大正の風貌（ふうぼう）の座の長閑（のどか）かな[*六二]

*六一　「永日光裡」で「ながひかり」と読ませるのか。「日が長くなって明るいうちに」という意味。
*六二　大正デモクラシーの頃に育った人々は、心穏やかだったことを表現しているのか。



オパール光（こう）ゆたりとありぬ春の海[*六三]

白魚や少年が言ふ舟の霊（たま）[*六四]

*六三　オパールは乳白色の地に赤や緑の輝きがある宝石。「ゆたりとありぬ」は「ゆったりとあった」という意味。宮城道雄に「春の海」という箏曲がある。
*六四　少年が白魚を「船霊（ふねだま）」、船の守護神にたとえたことを取り上げた。

逝く春や望郷の譜（ふ）を屋上園（をくじやうゑん）*六五

春昼（しゆんちう）の神域巫女（みこ）の声すなり*六六

*六五　卒業が近づく頃、屋上から故郷を思う歌声が聞こえるさまを詠んでいる。

*六六　「春昼」とは、日が長くなった春の昼間のこと。



墓裏の閑か春の蚊なりと思ふ

うつらねのうつら目覚めや春の昼*六七

*六七　うつらうつら寝て、目覚めても意識がぼんやりしているさまを、のどかな春の日と重ねている。

作家などと子は夢みつつ入学す*六八

青年の覇気(はき)横溢(わういつ)す夏野かな*六九

*六八　作家になりたいと言って、早稲田大学第一文学部に入学した息子のことを詠んだ。
*六九　「横溢」とはあふれ出ること。



風薫(かを)る湖(うみ)縹渺(へうべう)と一沙鷗(さおう)*七〇

街洗ふ雨よ五月(さつき)の茶房(さばう)より*七一

*七〇　果てしなく広がる湖と、砂上のカモメを対比させている。
*七一　茶房とは喫茶店のこと。

恋訥(とつ)と語る教師や花袋(かたい)の忌(き)[*七二]

虹たつや封書の重みポストに聞く

---

*七二「訥」とはどもってなめらかに話せないこと。訥弁(とつべん)。田山花袋には『蒲団』『田舎教師』などの小説がある。五月一三日の命日は、「花袋忌」と呼ばれる。



紫陽花(あぢさゐ)の風やボロ猫這(は)ひ出でし

昼寝覚(ねざめ)海はだらりと窓の外[*七三]

---

*七三　本来は昼寝から目覚めた本人が「だらりと」しているところを、窓の外に見える「海」に投影している。海がゆるやかにうねる「のたり」を、「だらり」で言い換えている。

小鳥葬る上さらさらと竹の秋[*七四]

蟻の道辿（たど）り揺れをり幼な髪

*七四　「葬る」は「はぶる」または「ほうむる」と読む。「はぶる」は「ほうむる」の古語。



夏帽を目深（まぶか）に歓喜童子かな[*七五]

裸子（はだかご）や纏（まと）ひしなべて踏みしだき[*七六]

*七五　「歓喜」は「かんき」または「かんぎ」と読む。「かんぎ」は仏教での読み方。

*七六　「纏ひし」はまとっていた物のこと。衣服。「なべて」はすべてということ。「踏みしだく」は踏んで滅茶苦茶にすること。

裸子の天真（てんしん）砂の眩（まぶ）しさよ[*七七]

*七七「天真」とは自然のままで飾り気がないこと。



四股（しこ）踏めば砂嚙（か）む指や雲の峰[*七八]

渓谷の潺湲（せんかん）新樹波うてり[*七九]

*七八「四股」とは力士が左右交互に足を高く上げて踏み下ろす動作。この場合の指は足の指。

*七九「潺湲」とは水がさらさらと流れるさまを表す。「うてり」は「打っている」ということ。

秋立つや風を孕(はら)みし捕虫網

朝刊のびしよ濡れ開く野分(のわき)かな*八〇

*八〇 「野分」とは秋から冬にかけて吹く強い風。台風。



野分あと夜(よ)は折鶴(をりづる)を吾子(あこ)とかな*八一

童謡の自(おの)づからなる木の実かな

*八一 「吾子」は古くは「あご」、のちに「あこ」と読むようになった。ここでは著者の娘のこと。

陽光を畳める地図や秋の蝶*八二

庭下駄の歩の二三歩や稲妻（いなづま）す*八三

*八二　秋の蝶を、陽光をたたんだ地図にたとえているところが面白い。

*八三　「稲妻」とは雷の光、雷光のこと。



郵便受の空っぽ風の芙蓉（ふよう）かな

思惟（しゐ）果てなし野分のあとの海の色*八四

船にをり慕情（ぼじやう）さ揺らぐ秋の浜

*八四　「思惟」は「しい」、または「しゆい」と読む。思考すること。

秋暁(しうげう)の微光雨戸(あまど)の隙間(すきま)より*八五

颶風(ぐふう)一過妻の素肌に光あり*八六

*八五「秋暁」とは秋の明け方のこと。
*八六「颶風」とは秋に吹く暴風のこと。



鰯雲(いわしぐも)叢林(そうりん)秋の声すなり*八七

鳥墜(お)つる湖辺(こへん)の華や秋の声*八八

*八七「鰯雲」とは秋によく見られるうろこ状の雲。「叢林」とは樹木がしげっているところ。
*八八「鳥墜つ」は狩猟の光景を表している。

風秋す海ほとりなる花圃（くわほ）の里[*八九]

冬暉（とうき）透く疎林幼稚舎の声すなり[*九〇]

---

*八九　「花圃」とは花畑のこと。

*九〇　「冬暉」は冬の光、冬の太陽。「疎林」とあるが、落葉して林はよりまばらに見える。



ざくと断（た）つ白菜芯の黄ばみをり

大根（だいこ）抜く地球歪（ゆが）むとばかりかな[*九一]

---

*九一　「大根」をここでは「だいこ」と読む。小林一茶の句「大根引き大根で道を教へけり」から着想したものか。

マフラーの颯爽市(さうそういち)に魚(うを)提(さ)げし

冬凪(ふゆなぎ)の光ゆ現れ来一汽艇(きてい)*九二

*九二　「冬凪」は冬のしけの合間に海がないでいること。「ゆ」は「より」を意味する古語。



連絡船上蹌踉(さうらう)とあり寒月光*九三

*九三　「蹌踉」とは足がふらつくこと。

# 炎の街



夏帽や砕石(さいせき)の道街(まち)となる

夏シャツの少年の瞳(ひとみ)真直(ます)ぐなり*九四

校舎裏手(うらて)に蛇打ちてをり五六人

*九四 「真直ぐ」はまっすぐなこと。

青年教師総身（そうしん）汗の怒りかな

ある時の汗の軀（く）臓腑（ざうふ）波うてり[*九五]

---

*九五「軀」は肉体、「臓腑」は内臓を表す。



七月の海鳴りやまず砂走る[*九六]

メーデーや風の記憶を老闘士[*九七]

---

*九六「海鳴り」とは海から聞こえてくる雷のような音。波やうねりが海岸で崩れるときに出す音。

*九七「風の」でどこからともなく伝わってくるという意味を表す。「メーデー」とは五月一日に開かれる労働者の祭典。

歩道橋脚下（きゃくか）熱風ありにけり

石油コンビナート金属ただに灼（や）くるかな*九八

*九八「ただに」はじかに、すぐにという意味。



夏草や焦砂（せうさ）を捲（ま）ける海の風*九九

都市港湾海南風（なんぷう）の焦砂かな

*九九「焦砂」は焼けるように熱くなった砂。「捲ける」は巻き上げるという意味。

炎昼（えんちう）の臨港地帯運河死す[*百]

炎昼や寂（じやく）とし白き石油基地[*百一]

*百　「炎昼」とは真夏の焼けるような昼下がりのこと。

*百一　「寂」とは人の姿が見えない様子。



伐折羅神将（ばさらしんしやう）炎昼の天極めたり[*百二]

カンナ燃ゆる機関区に来て貨車徐行

*百二　伐折羅神将は仏教の十二神将の一つで、忿怒（ふんぬ）の姿を示す。

油槽（ゆさう）群立河口満ち来る葉月汐（はづきしほ）*百三

秋行くと眼路（めぢ）遙（はる）かなり歩道橋*百四

*百三　「葉月」とは陰暦八月のこと。「汐」は潮、海水。

*百四　「眼路」とは見通せる範囲、視界。秋になると、空気が澄んで遠くまで見渡せる。



廃艇の銹（さ）び鉄塊（てつくわい）や秋の海

銹び止めの朱（あけ）鉄柱や冬の雲

朽船（きうせん）に鳥影（とりかげ）のあり波止（はと）の冬*百五

*百五　「鳥影」とは鳥が飛ぶ影。「波止」は防波堤のこと。

遠富士(とほふじ)や風枯荻(からおぎ)の埋立地*百六

海光(かいくわう)のいつぱい枯草の埋立地

*百六「枯荻」とは枯れた荻のこと。



廃屋(はいをく)や歩めばなべて冬の音*百七

冬帽子目深(まぶか)卑陋(ひろう)の性(しやう)たりし*百八

*百七「なべて」とはすべて、一面にといった意味。
*百八「卑陋」とは品性が卑しいこと。「性」は「しょう」「さが」と読めるが、ここでは形容動詞のタリ活用なので「しょう」と読む。本性や性分のこと。

外套（ぐわいたう）の風の広場に至るかな

冬の街青年の異装潤歩（いさうかつぽ）せり*百九

*百九「異装」とは変わった服装のこと。潤歩とは大またに悠々と歩くこと。



石油缶銹（さ）びひしやげある路地の冬*一一〇

*一一〇「ひしやげる」とは、押されてつぶれたさまを表す。

## 病める日々



鬱（うつ）なれば眼（まなこ）尖（とが）りし余寒（よかん）かな*一一一

違和（ゐわ）の座の余寒や壁のデスマスク*一一二

*一一一　「余寒」とは立春が過ぎたあとの寒さ。

*一一二　デスマスクは、死者の顔から型を取って作った石膏の面。

杖(つゑ)の歩の肩の尖りの余寒かな

亡母(はは)に縋(すが)る魂(たま)の微光や春の夢

早春やひたすらに思ふ歩まねば*一一三

*一一三　著者は糖尿病を病み、健康のために長時間散歩をしていた。



鳥雲(てううん)に風にしばたく病者の眼(め)*一一四

*一一四　「鳥雲」は「ちょううん」と読み、小鳥が多数群れて雲のように見えるさまを表す。

春寒や妻にす埒(らち)もなき鋭声(とごゑ)*一一五

朧(おぼろ)とも無明(むみやう)の炎(えん)とも死の歩(ほ)とも*一一六

*一一五「春寒」は「しゅんかん」または「はるさむ」と読む。「埒もない」はつまらない、たわいないという意味。「鋭声」は怒鳴りつける声。

*一一六「朧」とはぼんやりかすんでいるさま。「無明」とは仏教でいう根本的な無知。



花冷(はなび)えの夜(よる)や呻唸(うなり)の一病者*一一七

若葉光(わかばこう)仰ぐ疼痛(とうつう)を意識しつ*一一八

*一一七「花冷え」とは、桜の咲くころ急に気温が下がること。

*一一八「疼痛」とはずきずきする痛み。

扇風器刻々虚無を掠（かす）めつつ*一一九

籐（とう）寝椅子（ねいす）夢は吾が屍（し）を風に晒（さら）し*一二〇

*一一九　「掠める」はここでは、触れそうで触れずに通り過ぎる。かする。
*一二〇　「籐」は熱帯性のツル草で、乾燥させて家具などを作る。「屍」とはしかばね、死体のこと。



秋の雷（らい）寝返れば骨きしきしと

病めば黙（もく）す光の世界秋の蝶

遠稲妻（とほいなづま）亡母の影に死を問ひつ*一二一

整形外科内科と病（や）みて秋長（た）けし*一二二

*一二一「亡母」には「ぼうぼ」「ぼうも」「もうぼ」といった読み方がある。

*一二二 著者は糖尿病、慢性肝炎のほか、股関節炎などを病んでいた。「長けし」とは長いこと。



病褥（びやうじよく）の眼（め）や秋麗（しうれい）の大玻璃戸（おほはりど）*一二三

*一二三「病褥」とは病床、「秋麗」とは秋の日のよく晴れてのどかなさま、「玻璃」とはガラスのこと。ここでは、入院生活で病室の窓から見えた秋空と、ガラスで隔てられた思いを詠んでいる。

秋果（しうくわ）油彩描きさしの儘（まま）入院す[*一二四]

短日（たんじつ）や目覚むればはや暮るる空[*一二五]

*一二四「病褥」とは病床、「秋麗」とは秋の日のよく晴れてのどかなさま、「玻璃」とはガラスのこと。ここでは、入院生活で病室の窓から見えた秋空と、ガラスで隔てられた思いを詠んでいる。

*一二五「短日」とは日の短い冬の日のこと。入院生活で目が覚めると、早くも日が暮れつつあったさまを詠んだ。なお、著者には『短日』という詩集がある。



寡黙（くわもく）なる医師よ師走（しはす）の夜（よ）の回診

寒玻璃（はり）の空よ医師言ふ血糖値[*一二六]

*一二六　糖尿病では、血糖値が病状の進行を示す目安となっている。

湯婆(たんぽ)抱いて尿意を耐ゆる真闇(まやみ)かな*一二七

便器乞(こ)ふ拡声器音冬の夜*一二八

*一二七「湯婆」とは湯を入れて足を温める容器。
*一二八 ここでいう「拡声器」とは、ベットの枕元にあるナースコールのこと。



寒月(かんげつ)や魂抉(たまえぐ)りたるメスなりしか*一二九

病室へ妻 凩(こがらし)を負(お)ひて来し*一三〇

*一二九「寒月」とは冬の月のこと。ここでは冬の三日月を手術に用いるメスにたとえている。
*一三〇「凩」は「木枯らし」とも書き、冬の初めに吹く冷たい風のこと。

小春日(こはるび)や蹣跚(まんさん)の歩(ほ)の一病者*一三一

薄氷や途上危ふき病者の眼*一三二

---

*一三一「小春日」とは冬の初めの暖かい日のこと。「蹣跚」はよろめきながら歩くさま。

*一三二「薄氷」は「はくひょう」「うすらい」などと読む。路上にはった薄氷がよく見えず、転びそうであやうい状況を詠んでいる。



# 詩の坩堝

麗(うらら)かの詩のほしい儘天降(ままあまくだ)り来よ

春暁(しゅんげう)の雲間花神(くわしん)の息すなり[*一三三]

*一三三「花神」とは花の精、花をつかさどる神のこと。



囀(さへづ)りや広告の裏に綴りし詩[*一三四]

梅見行情思(じやうし)自づと詩の坩堝(るつぼ)[*一三五]

*一三四　かつて、新聞の折り込み広告の多くが裏は白紙だった。個人商店が広告を入れることは、昭和時代まではよくあった。

*一三五「情思」とは心の思い。「坩堝」とは金属を溶かすのに用いる耐熱性の容器。ここでは多くの物が入り交じったところ。

詩は炎なり探梅（たんばい）果てし夕べの歩*一三六

春寒し〆（しめ）切りの稿（かう）定まらず*一三七

---

*一三六 「探梅」とは、詩作や句作のために梅を見ること。観梅。

*一三七 「稿定まらず」とは、推敲が終わらず、未定稿のままの状態。



麗（うらら）かや陶土にあてる竹の箆（へら）

詩の壺を野に置きてみよ四月馬鹿*一三八

---

*一三八 「四月馬鹿」は「エープリル・フール」の直訳。四月一日は嘘をついてもいい日と言われる。

花に思ふ音楽河畔暮れ初(そ)めし*一三九

梨の花ゆらめきの炎のかの子の碑(ひ)*一四〇

*一三九　花と言えば、桜のことである。滝廉太郎の「花」から連想したものか。

*一四〇　小説家岡本かの子は、神奈川県橘樹(たちばな)高津村（現在の川崎市高津区）二子(ふたこ)の地主の家に生まれた。耽美(たんび)的な作風で知られる。かの子の文学碑は、実家に近い二子神社の境内にある。夫は漫画家の岡本一平、長男は画家の岡本太郎である。



藤の花朗誦(ろうしょう) 源氏物語*一四一

画廊幾つ銀座は今し遅日(ちじつ)光*一四二

*一四一　紫式部の『源氏物語』では、光源氏の藤壺に対する禁断の恋が語られる。

*一四二　「遅日」とは日暮れの遅い春の日のこと。著者は遠縁である画家、中西新太郎と親交があり、個展が開かれた銀座の画廊に足を運んでいる。

画布奔(はし)る筆端(ひったん)そそけ麦の秋*一四三

*一四三　著者は油絵も描いており、画布の上を走る絵筆の毛羽立つさまを、麦の秋である初夏、収穫を控えた麦の穂になぞらえている。



梅雨(つゆ)の窓油彩破調(はてう)のリズムかな*一四四

奔放(ほんぱう)の油彩万緑(ばんりよく)閑(しづ)かなり*一四五

*一四四　「破調」とは調子の整わないこと。窓に打ちつける梅雨の雨を、調子の外れたリズムの油絵になぞらえている。

*一四五　「万緑」とは見渡す限り緑であるさま。

冷房の画廊詩想の閑(ひま)ありし

水墨画展語る爽秋(さうしう)の丘の家*一四六

*一四六　「爽秋」は「そうしゅう」と読む。さわやかな秋のこと。



金亀子(こがねむし)一閃(いっせん)闇の奥よりす

白南風(しらはえ)や読み継ぐ戦中作家の記

夜の蜘蛛(くも)校正洩(も)れし一語かな*一四七

*一四七　夜、原稿用紙の上をクモがはっているさまを、誤植の文字になぞらえている。

破棄の稿積みしを歩（あゆ）む夜の蟻（あり）

明易（あけやす）や詩は縹渺（へうべう）の海と空



吾亦紅（われもかう）信濃路（しなのぢ）なれば故旧（こきう）の詩*一四八

竹光る朔太郎忌（さくたらうき）や雨催ひ*一四九

*一四八　「吾亦紅」とは夏の終わりに暗紅色の花をつけるバラ科の多年草。「故旧」とは、むかしなじみであること。

*一四九　萩原朔太郎は大正・昭和の詩人。朔太郎忌は、朔太郎の命日である五月一一日。「竹」は詩集『月に吠える』所収。「雨催い」は「あまもよい」または「あめもよい」と読み、雨が降りそうな空模様を表す。

真夜(まよ)出帆(しゅっぱん)風を額(ひたひ)に四迷(しめい)の忌(き)*一五〇

*一五〇　二葉亭四迷は明治時代の小説家。言文一致の小説『浮雲』や、ツルゲーネフの翻訳で知られる。ロシアから帰国する途中、ベンガル湾の船上で病死した。五月一〇日が命日。



芙美子(ふみこ)忌や白日に濡れ小埠頭(ふとう)*一五一

河童忌(かっぱき)や読みさしのまま同人誌*一五二

*一五一　林芙美子は昭和時代の小説家。代表作は『放浪記』。命日は六月二八日。桜島には林芙美子の文学碑が建っている。「花のいのちはみじかくて　苦しきことのみ多かりき」とある。

*一五二　「河童忌」は芥川龍之介の命日である七月二四日。「ぼんやりした不安」という言葉を残して自殺。『河童』は代表作の一つ。

詩を醸(かも)す甕(かめ)欲し月は天心(てんしん)に*一五三

翻訳詩明治を醸す葡萄かな*一五四

*一五三　小林一茶の「名月をとつてくれろと泣く子かな」から発想したのか。「天心」とは空の真ん中。

*一五四　明治時代の翻訳詩集としては、上田敏の『海潮音』が有名。



秋の沼猟歩(れふほ)の黙の思惟(しゆい)様々*一五五

旅果ての雲よ一路(いちろ)の秋す声

*一五五　「猟歩」は「りようほ」と読む。獲物を探して歩き回ること。「思惟」は「しい」とも読む。深く考えること。

天辺（てっぺん）の風ゆ天降（あまくだ）り来秋の蝶*一五六

秋の原素描（そべう）が摑（つか）む一老樹

*一五六　「ゆ」は奈良時代に用いられた助詞で、「から」「より」の意味。



良寛（りやうくわん）の里辺（さとべ）や書家と秋思（しうし）の歩*一五七

詩は鳥と無辺（むへん）を遊ぶ花野（はなの）かな*一五八

*一五七　良寛は江戸時代後期の歌人、禅僧。越後（えちご）の出雲崎（いずもざき）の生まれ。

*一五八　「無辺」とは果てしがないこと。

キャンパスの想白菊（しらぎく）を光とす

老酒の酔ひ蹌踉（さうらう）と白秋忌[*一五九]

*一五九　「老酒」は中国語で「ラオチュー」と読む。「蹌踉」は「そうろう」と読む。足もとがふらつくこと。白秋忌は詩人、北原白秋の命日で、一一月二日。



漱石（そうせき）忌憔悴（せうすい）の歩の胃の痛み[*一六〇]

咳こめば糸断（た）ち切れし詩想かな

*一六〇　明治・大正の小説家夏目漱石は、神経衰弱と胃潰瘍で苦しんだ。漱石忌は、漱石の命日である一二月九日。

韓国の詩人の眉宇（びう）や冬の街*一六一

詩が穿（うが）つ胸外套（ぐわいたう）の襟（えり）立てし*一六二

*一六一　「眉宇」とは「まゆのあたり」を指す。「憂いを眉宇に漂わす」「眉宇に漂う決意」などの表現がある。朝鮮独立や韓国の体制批判で、獄につながれた韓国の詩人への思いを表している。

*一六二　「穿つ」とは穴をあけること。



死刑囚の手記読むや雨冬隣（ふゆどなり）*一六三

*一六三　死刑囚とは反体制詩人で、朴正熙（パク・チョンヒ）政権下で死刑判決を受けた金芝河（キム・ジハ）の手記のことか。

寒林に一人を晒(さら)す杜詩(とし)読みつ[*一六四]

眠る山鳥獣の詩蔵(うたざう)したり

*一六四「杜詩」とは、唐の詩人杜甫(とほ)の詩。



枯木山山歌野唱(さんかやしやう)の声すなり[*一六五]

冬夕焼(ふゆゆふやけ)詩は幻想の巨樹(きよじゆ)たりし

詩の坩堝(るつぼ)たり一望の大枯野

*一六五「山歌」とは田舎でうたわれる歌。山野で働く者がうたう歌。

夢に見し吾(わ)が屍(し)雪嶺(せつれい)浄(きよ)かりし*一六六

冬の夜の卓上(たくじやう)詩あり玻璃(はり)の壺

*一六六「屍」は死体、しかばね。「雪嶺」とは雪をいただく山のこと。



寒灯下詩の凛々(りんりん)を綴(つづ)るかな*一六七

吾が詩編(あ)まむ氷湖を染むる夕茜(ゆふあかね)*一六八

*一六七「凛々」とは心身が引き締まるさま。勇ましい様子。

*一六八「茜」は染料に用いる野草。根から暗赤色の染料が取れる。ここでは紫がかった赤い夕空を表している。

## 後記

昭和三二年、偶然のことから故八木九鬼先生の知遇を得て渋柿に入会した。九鬼先生の最晩年、私が二九歳の時である。九鬼先生没後は不破博先生に師事。その間、故野村喜舟先生、徳永山冬子先生の誌上選を戴いた。振返って思えば、いずれの先生方に対しても不肖の弟子であったが、ともかく今日まで牛歩の歩みを貫くことが出来たのは一重（ひとえ）に諸先生方の御指導の賜物である。

今回句集上梓（じょうし）にあたっては不破先生より懇切な序言まで戴いた。記して感謝申しあげるとともに、今日までの先生の直接の御指導を無にすることのないよう一層の精進をお誓いする次



第である。

昭和六二年一月一五日

高野　邦夫

## 補記

本書は一九八七年（昭和六二）に、芸風書院から刊行された『髙野邦夫句集』を原本にし、俳句に詳しくない読者向けに、ふりがなと多数の注を加えたものである。本来、俳句は原文のままで読まれるべきものだが、季語など俳句特有の語や、漢籍に用いられる古語など多数含むため、現代人に理解しやすいように配慮した。

なお、俳句のふりがなは、句に合わせて歴史的仮名遣いにした。原本には簡潔な略歴が加えられているが、著者の甥で私の従兄である故・山川清秀氏の作成した年譜に加筆したものを巻末に添えることにする。



二〇一九年六月二十五日

髙野敦志

# 略年譜

昭和三年五月十三日　川崎市南河原（現、幸区南幸町）に生まれる。父勝吉（かつきち）。母こと。三男。

昭和十九年三月　神奈川県立神奈川工業学校三年を修了。（十五歳）

昭和十九年四月　海軍甲種飛行予科練習生として奈良海軍航空隊に入隊

昭和二十年　終戦　復員

昭和二十一年　日産重工業株式会社入社

昭和二十二年　日産重工業青年学校入学

昭和二十三年三月　青年学校卒業、日産重工業退社



昭和二十三年四月　日本大学高等師範部国語科入学

昭和二十六年三月　同学卒業

昭和二十六年四月　川崎市立中学校教諭となる。この年以降、市内の臨港中学や西中原中学で国語を教える。

昭和三十七年二月　第一詩集『寒菊』（五月出版）発表

昭和三十七年四月　小泉孝子と結婚

昭和四十年四月　川崎市立工業高等学校定時制の教諭となる。

昭和四十四年二月　雑誌『鷹』第一号発刊

昭和五十二年十一月　雑誌『鷹』第二十号

昭和五十三年七月　詩集『氷湖』（昭森社）

昭和五十四年　雑誌『鷹』第二十七号発行、以降廃刊。

昭和五十五年一月　詩集『燦爛の天』（昭森社）

昭和五十五年八月　出版記念会、化膿性股関節炎発病。以降入退院を繰り返す。

昭和五十七年九月　詩集『定時制高校』（昭森社）

昭和五十八年三月　詩集『川崎』（昭森社）

昭和五十九年四月　詩集『修羅』（昭森社）

昭和六十年四月　詩集『彫刻』（昭森社）

昭和六十年十二月　詩集『曠野』（芸風書院）

昭和六十一年七月　詩集『銀猫』（昭森社）

昭和六十二年四月　句集『高野邦夫句集』（芸風書院）

昭和六十二年十二月　詩集『日常』（昭森社）

平成元年十二月　詩集「川崎（ラ・シテ・イデアル）」（教育企画出版）



平成三年七月　詩集『短日』（吟遊社）

平成五年一月　詩集『峡谷』（吟遊社）

平成六年九月　詩集『鷹』（吟遊社）

平成七年八月　詩集『敗亡記』（吟遊社）

平成九年四月十四日　敗血症により、横浜市青葉区の昭和医大藤が丘病院で他界（行年六十八歳）。四十九日の法要の後、川崎市宮前区の初香山本遠寺（ほんのんじ）に埋葬。法名は「至徳院法教日邦信士」

平成十年四月　詩集『廃園』（遺作）（吟遊社）